史料紹介

「児玉源太郎」書簡を読む

解読　古文書解読会会員一同

徳山地方郷土史研究会の創立二五周年記念事業の一環として「児玉源太郎資料展」が、周南市立中央図書館で開催されました。

書簡

17×151cm　額装

明治七年（一八七四）八月二七日の書簡

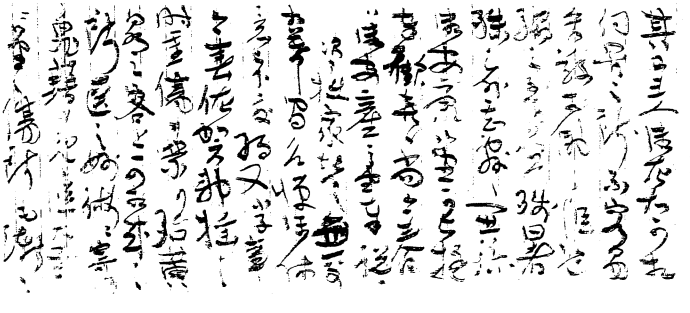
源太郎が、徳山藩医遠藤春岱の子で内務省に勤務した遠藤貞一郎（明治二一年没・四八歳）に宛てた書簡であり、文面から明治七年二三歳の時のものと考えられる。

明治七年二月、江藤新平らが反乱、いわゆる佐賀の乱がおきた。源太郎はこのとき肥前の国佐賀に出征し銃創を負った。福岡から大阪へと移動して療養し、その後熊本鎮台へ赴任することになるが、この書簡は赴任直前のものである。

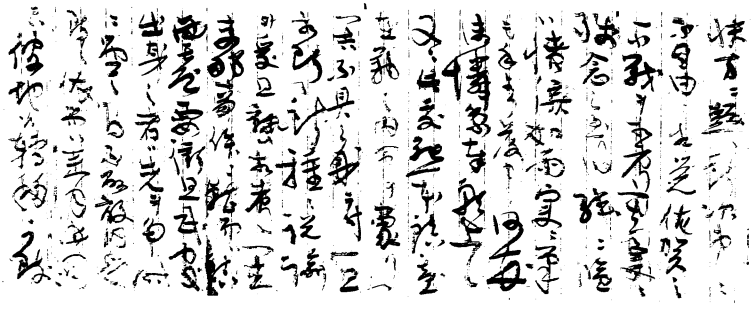
解読に取り組む会員たち

解読文

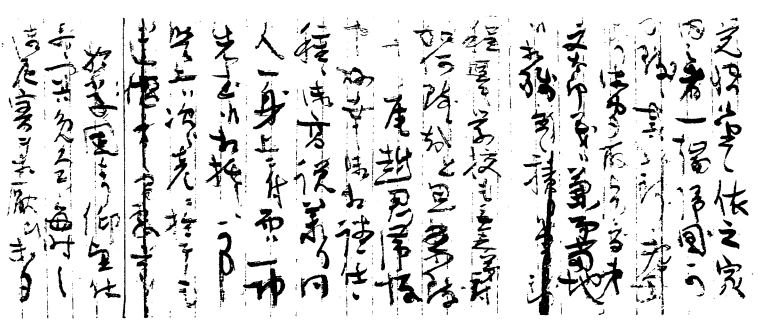
其已来御左右可相
伺筈之所　不容易
失敬相働候段　恐
縮之至り御坐候　残暑
殊之外甚敷候へ共弥
御安康御坐可被遊
奉歓喜候　尚今春
ハ御安産之由奉祝候
　次に拙家　皆々無事
相暮候間　乍憚御休
意被下度　将又小子事
今春佐賀動揺之
時重傷ヲ蒙り　殆黄
泉之客と可相成之
所　医之妙術ニ寄り
鬼籍ヲ免レ候段　大幸
二御坐候　傷所漸々



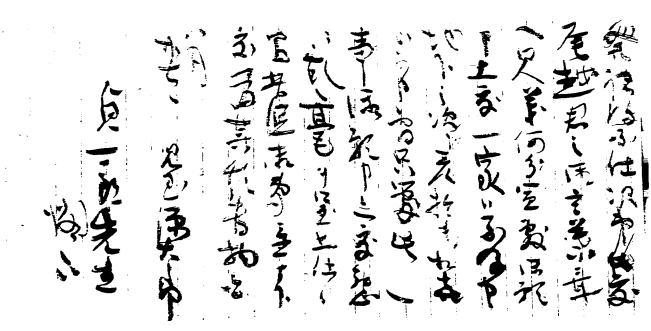
快方ニ趣候所　次第ニ
不自由ヲ相覚　佐賀之
死戦ヲ相考へ共実ニ
残念之至り也　紙ニ臨
ハ噴涙如雨実ニ筆
も手より落申候　何卒
御憐察奉願上候
又々此度熊本鎮臺
在勤之内命ヲ蒙り候
へ共　不具之身ニ付一旦
相断候所　種々説諭
ヲ受　且暫相考候へ共
支那事件ニ就而ハ鎮
西臺要衝　且武官
出身之者ハ先ヲ争時
ニ御坐候間　不取敢内受
致候　依而ハ来月下旬
ニハ彼地江轉移可致



覚悟御坐候　依之家
内之者一端帰国可
為致候　其以所ハ老母
より御聞取被下度　弟
文太郎義ハ兼而当地
江相残置候積り御坐候所
程宜キ学校も無之　義ニ付
如何致候哉と思案致
候也　尾越君滞坂
中故　幸御相談仕候
種々御高説承り　同
人一身上ニ付而ハ一切
先生江相託し可申
然ル上ハ次郎彦ニ於テも
遺憾有之間敷云々
　於小子固より仰望仕
忝候へ共兎角毎時之
御厄害ヲ相厭ひ　未タ



発語得不仕次第　此時
尾越君之御言葉ニ甘
へ同人義　何分宜敷御願
申上度一家ハ不及申
地下之次郎彦於も相喜
び可申候間　只管此一
事御願申上度態
々乱毫ヲ呈上仕候
間　此段御聞置被下
度　為其乱書拝白
八月
二十七日
児玉源太郎
貞一郎先生
閣下



読み下し文

其れ已来御左右相伺うべく筈の所、不容易失敬相働き候段、恐縮の至り御坐候、残暑殊の外甚だ敷く候へども、弥御安康御坐遊ばされるべく歓喜奉り候、尚今春は御安産の由祝奉り候

次に拙家皆々無事に相暮らし候間、憚りながら御休意下され度、将又小子事今春佐賀動揺の時重傷を蒙り、殆んど黄泉の客と相成るべくの所、医の妙術に寄り鬼籍を免れ候段、大幸に御坐候、傷所も漸々快方に趣き候所、次第に不自由を相覚え、佐賀の死戦を相考えへども実に残念の至り也、紙に臨めば噴涙雨の如く実に筆も手より落ち申し候、何卒御憐察願いあげ奉り候、又々この度熊本鎮台在勤の内命を蒙り候へども、不具の身に付き一旦相断り候所、種々説諭を受け、且つ暫く相考え候へども、支那事件に就いては鎮西台要衝、且つ武官出身の者は先を争う時に御坐候間、取敢えず内受致し候、依っては来月下旬には彼の地え転移致すべく覚悟に御坐候、これに依り家内の者一端帰国致さすべく候、其の以所は老母より御聞き取り下され度、弟文太郎義は兼ねて当地え　相残し置き候積りに御坐候所、程宜き学校もこれ無き義に付き如何に致し候哉と思案致し候也、尾越君滞坂中故、幸い御相談仕り候、種々御高説承り同人一身上に付いては一切先生え相託し申すべく、然る上は次郎彦に於いても遺憾これ有り間敷く云々、

小子に於いて固より仰望仕り忝く候へども兎角毎時の御厄害を相厭い未だ発語を得仕らず次第、この度尾越君の御言葉に甘え同人義、何分宜敷く御願い申し上げ度一家は申すに及ばず地下の次郎彦に於いても相喜び申すべく候間、只管この一事御願い申し上げ度態々乱毫を呈上仕り候間、この段御聞き置き下され度、其の為乱書拝白

八月二十七日

児玉源太郎

貞一郎先生閣下